

漢音漢語における去声＋去声の接続および後項の「声調」変化 —尊経閣文庫蔵『色葉字類抄』(三巻本)を用いて—

加藤 大鶴

1 本稿の目的

日本漢字音においては、漢字形態素が接続しひとつの漢語となる時、音調のうえでもひとつの単位となろうとする動きが認められる。呉音漢語においてよく知られている、上昇調＝《去》*¹が作る2字の接続のうち後項が高平調＝《上》となるのは、その一例である。一方、13世紀ごろの日本語アクセントを反映すると想定される『新猿楽記』を用いた調査では、漢音漢語においては呉音漢語とは違うふるまいをすることが分かっており、《去》の接続のうち後項が《平》となって中低形を回避する(加藤大鶴 2015)。次に『新猿楽記』の実例を示す。

- 呉音漢語 《去》＋《去》→《去上》
 - －「医王」イワウ RHH、「屏風」ビヤウブ LHH、「人間」ニンゲン LHHH
- 漢音漢語 《去》＋《去》→《去平》
 - －「吏擢」リカン RLL、「恋慕」レンボ LHL、「運命」ウンメイ LHLL

同様に、《上》＋《去》の後項も呉音漢語で《上》となり、漢音漢語で《平》となる。

さて、中低形を回避するための、この異なる2つの方法は漢語を形成するプロセスの違いにあると考えられた。漢音漢語については、和語の複合語が形成される場合の接合段階、すなわち一語の複合が緊密でない場合のアクセントの振る舞いと似ている。このような動きをするためには後項の去声字が複合の前段階において、たとえば和語二拍名詞第四類と同じく明確な低起性を有していると考えなければならない。実際に、『新猿楽記』の漢音漢語と呉音漢語について去声字のふるまいを比較すると、語頭環境においても非語頭環境においても、漢音のほうに明瞭に低起性が保たれていた。それが日本語アクセントの共時的な体系のもとで、上野和昭 2012 が指摘するように*²和語の複合語と同様のプロセスで複合したと考えるのが自然であろう。そうであれば漢音の場合は、一字ずつの発音がまず

*¹ 本稿では調値を表すとき平＝低平調、上＝高平調、去＝上昇調をそれぞれ《平》《上》《去》のように示す。韻書に示される調類を表すときは〈平〉〈上〉〈去〉のように示す。また拍レベルでアクセントを論じる時はL＝低平調、H＝高平調、R＝上昇調を用いる。

*² 上野は、去声字の韻尾が十分独立せずに漢語を形成する場合とは異なり、LHの形で2拍に読まれたあとで「接合」した結果LHLL型が生まれた、とする。

学習され、それが後に複合されるプロセスが想定される。漢音の学習が字書や韻書に支えられたことも併せて考えられよう。

しかし漢音漢語についてのこうした見通しは十分に確かめられたわけではなく、時代的にも資料的にもどのような広がりを持っているのか、ほとんど明らかとはなっていない。むしろ漢籍訓読資料の漢音には、呉音に見られるような、「上声・去声に続くときに去声が上声になる」や「一音節字は去声から上声になる」といった傾向が一般的ではなかった(佐々木勇 2009, 610-611)といった指摘もある。一方、字音声調の規範を離れ、日本語音韻体系の影響が強いとも考えられる文献、例えば『本朝文粹』(石山裕慈 2014)では必ずしもそうとは言えない分析結果が報告されている。漢音漢語の声調変化については、より多くの資料からの分析を必要としていると言えるのである。そこで本稿では、漢語声点資料として取り上げられることの多い、尊経閣文庫蔵『色葉字類抄』(三卷本)を分析の対象とし、韻書〈去〉のふるまいと中低形の回避について論じることとする。

2 尊経閣文庫蔵『色葉字類抄』(三卷本)の漢音漢語

『色葉字類抄』は、橘忠兼編纂の院政期成立の国語辞典である。本資料は平安時代末期の日常実用の語を広く和語・漢語を採録し、イロハ順に分類・配属したものとされる。尊経閣文庫蔵の三卷本は院政期から鎌倉期の書写とされるが(峰岸明 1999 ほか)、漢語・和語ともに多数の声点が記されることから以前より字音声調・アクセント研究として重視されてきた。立項する漢字や漢語に差声される声点は基本的に漢音声調を反映し、また「俗」注記のない単字は呉音形が認められないなどの特徴が指摘されている(奥村三雄 1966、高松政雄 1980a・1980b)。声点以外の字音注記についていえば、反切は『広韻』と一致し(鈴木真喜男 1963)同音字注も中古音と一致するという(二戸麻砂彦 1979)。日常実用の語を採録したとはいえ立項する漢字・漢語への声点のなかには日常的な音調ではなく、人為的で「正しい単字声調にもどして加えられた」部分があり、「必ずしも当時の常用の漢語声調を示していない」ものもあるという指摘もある(沼本克明 1979)。

本資料における字音注記を院政期から鎌倉初期の、ある言語的状况を反映したものとしてみてよいかについては、このような事情で慎重な立場が取られてきたが、近年、呉音漢語(藤本灯 2013)や漢音漢語(佐々木勇 2006)の字音声調を対象とした分析がなされている。佐々木氏によれば、漢音的な特徴として、全濁上声字の去声化、侯韻明母字の模韻化など、必ずしも中古音に一致しない唐代の特徴を有することが指摘され、さらには日本語化された漢音声調も含まれることが示唆されており、字音の規範的な位相と日本語使用の位相との両面からの分析が必要であることが明らかになりつつある。

本稿では佐々木氏の指摘に導かれながら、本資料の2字で構成される漢音漢語の声点を

抜き出し、《去》のふるまいを分析する。冒頭で述べたように、漢音漢語が形成されるプロセスが、一字ずつの音が学習された後でそれを日本側で複合させたと考えるならば、反切や同音字注によって単字単位の字音学習がなされていたことが明示されているのは都合が良い。また本資料の字音注が常に韻書などを用いた規範的な立場からのみ記されたものでないという仮定も、《去》が接続によって変化するさまを観察するには都合が良いといえる。

さて、上述の通り本資料には呉音漢語が混入していることが知られている。本稿では次の手続きによってできるかぎり漢音漢語以外除き、漢音漢語を抽出した*3。

- 「俗」注記があるものを除く。
- 主として立項する漢語の右傍に注記された仮名音注に着目し*4、明らかに呉音や唐音に基づくものを除く。
- 仮名音注だけでは字音系統が判別できないときは、その声点も判断材料に含めた。特に2字を構成する前項が漢音声調から説明がつかない場合、たとえば韻書で去声であるのに声点は平声である場合は呉音漢語である可能性が高いとみなした。
- 特に注視しようとする後項の去声字への差声が双点（濁音表示）である場合、それが全濁字であれば呉音である可能性があるとして、適宜呉音資料に記載される声調を確認した。その確認結果については第4節に述べる個別的な分析の際に言及する。

3 分析方法と分析結果の概要

尊経閣文庫蔵『色葉字類抄』（三卷本）に立項する2字漢語のうち、前節に述べた方法に基づいて、漢音漢語を抽出した結果を表1にまとめた。表では得られた漢音漢語を構成する字音が、韻書（『広韻』）においてどの調類に配属されるかを調べ、その調類と『色葉字類抄』記載の声点とを対照させ、全体の分布を見る。

表の横向きには韻書における声調の組み合わせ*5を〈 〉に示し、縦向きに差声された

*3 漢音漢語以外の漢語を構成する大部分は呉音漢語であるということになるが、厳密には字音系統から説明がつかないものも含まれる（次節の表では「非漢音」とした）。

*4 佐々木勇 2006 によれば立項する漢語右傍に記される仮名音注に比べて、下部に記される仮名音注は「国語の語彙体系の中に入ったと認められる漢語の語形表示」（峰岸明 1999）としての色彩が強く、均質な字音体系を見ようとする立場から等しく扱うべきではないことが述べられる。ただし本稿では漢音漢語を可能な限り抽出しようとする立場に立つので、語形が明確に呉音でなければ、右傍に記されるものと等しく扱っている。

*5 ただし全濁上声は便宜上、去声に含めた。次節に掲げる個別例には、韻書で全濁上声字であるものはその旨を記している。

声点を示した。声点はほぼ調値を示すが、本稿では平声点については六声を区別せずに扱う*6。掲げた数字は異なり語数を示し、()内の数字は韻書における声調の組み合わせのうち、各語に差された声点の組み合わせが占める%を示す。右端の列には、参考までに非漢音とみなしたものの数を示した。

表中、網掛けをした部分は掲げる数字が目立って多い部分である。いずれも、韻書が示す声調の組み合わせの大部分と声点とが、〈上平〉—上平（上声点+平声点）という対応をなしていることが確認される。しかし、〈上去〉および〈去去〉のような、そのままの音調的实现では中低形になってしまう組み合わせに、対応から外れるものも確認される。いずれも、中低形をなしてしまう声調の組み合わせのうち後項に平声点が差されるものが4割程度認められ、その分だけ本来の組み合わせの占める割合が低いものとなっている。

	〈上平〉	〈上上〉	〈上去〉	〈去平〉	〈去上〉	〈去去〉	合計	呉音漢語
上平	86 (85)	7 (13)	30 (34)	10 (7)	1 (1)	3 (2)	137 (23)	24 (7)
上上	3 (3)	39 (71)	8 (9)	1 (1)	6 (8)	3 (2)	60 (10)	13 (4)
上去	1 (1)	2 (4)	44 (51)	0 (0)	0 (0)	10 (8)	57 (10)	5 (2)
去平	8 (8)	0 (0)	4 (5)	118 (80)	7 (9)	50 (38)	187 (31)	140 (42)
去上	3 (3)	7 (13)	0 (0)	15 (10)	58 (77)	13 (10)	96 (16)	144 (44)
去去	0 (0)	0 (0)	1 (1)	4 (3)	3 (4)	51 (39)	59 (10)	4 (1)
合計	101 (100)	55 (100)	87 (100)	148 (100)	75 (100)	130 (100)	596 (100)	330 (100)

表1 韻書声調と声点型の対応表：異なり語数

以上から本資料の漢音漢語の声点について分かることをまとめると、次の3点となる。

1. 韻書が示す調類と実際に差声された声点の大部分は、そのまま《上去》や《去去》に対応している。

*6 したがって本稿で認定した平声点には低平調と下降調を表すものが混在していることになるが、いずれであっても上声や去声に後接する場合には中低形回避に関与しない。稿者は下降音調そのものを認めないわけではない。

2. 〈上去〉や〈去去〉のような中低形となるものも4割から5割程度、そのまま対応している。
3. 韻書で中低形となってしまう組み合わせのうち、4割程度は後項を《平》とすることで中低形を回避している。

4 韻書《上去》の漢語

下記では、上表に示した韻書〈上去〉の漢語のうち、声点が上平、上上、上去となるもの、および韻書〈去去〉の漢語のうち、声点が去平、去上、去去となるものの実例をすべて掲げる。掲出に際しては、「」に立項する2字漢語、続いて声点と、記載があれば仮名音注を示した。出現箇所は[1/107b/4]ならば、上巻・107丁・裏・4行目を示す。韻書(『広韻』)における調類は(韻)の後に掲げた。上声については清濁(全清・次清・次濁・全濁)も記した。本分析では、全濁上声のものは去声相当に分類している。去声については清濁をいちいち示していないが、必要に応じて言及する。

■上平となるもの

1. 「雅意」上濁平カイ [1/107b/4] (韻)次濁上去
2. 「酒坐」上平 [2/082a/6] (韻)全清上去
3. 「以降」上平イカウ [1/012b/7] (韻)次濁上去
4. 「虚誕」上平キヨタン [2/062a/5] (韻)次清平全濁上
5. 「左降」上平 [2/052a/5] (韻)全清上去
6. 「左道」上平サタウ [2/052b/1] (韻)全清上全濁上
7. 「美麗」上平ヒレイ [2/098a/1] (韻)次濁上去
8. 「理乱」上平リラム [1/075b/7] (韻)次濁上去
9. 「虜掠」上平ロリヤウ [1/019a/5] (韻)次濁上去
10. 「感荷」上平カムカ [1/109b/7] (韻)全清上全濁上
11. 「棗地」上平サウチ [2/051b/4] (韻)全清上去
12. 「罌駕」上平ハウカ [1/047b/4] (韻)全清上去
13. 「勇士」上平ヨウシ [1/117b/4] (韻)次濁上全濁上
14. 「累路」上平ルイロ [1/079b/3] (韻)次濁上去
15. 「往事」上平ワウシ [1/090a/2] (韻)次濁上去
16. 「遠處」上平 [2/089a/6] (韻)次濁上去
17. 「窈窕」上平エウテウ [2/017a/2] (韻)全清上全濁上

18. 「梗概」 上平濁カウカイ [1/109b/6]㊦全清上去
19. 「簡要」 上平カンエウ [1/109b/7]㊦全清上去
20. 「饗應」 上平キヤウヲウ [2/062a/5]㊦次清上去
21. 「採用」 上平サイヨウ [2/051b/2]㊦次清上去
22. 「草案」 上平 [2/052a/6]㊦次清上去
23. 「悚望」 上平濁シヨウハウ [2/084b/3]㊦全清上去
24. 「擾乱」 上平エウラン [2/017a/7]㊦次濁上去
25. 「等輩」 上平濁トウハイ [1/062b/5]㊦全清上去、上平濁トウハイ [1/062b/6]
26. 「餅脧」 上平濁/上去濁ヘイタム [1/051b/1]㊦全清上去
27. 「寶劍」 上平ホフケン [1/047b/1]㊦全清上去
28. 「潦倒」 上平ラウタウ [1/049a/1]㊦次濁上去
29. 「猥誕」 上平ワイワウ [1/090a/2]㊦全清上去
30. 「椀飯」 上平濁ワウハン [1/088a/3]㊦全清上去、上平濁ワウハン [1/090a/5]

上記リストには加えなかったものに、「謹慎」上平濁キンシン [2/062a/3]㊦全清上去、「擁怠」上平濁ヲウタイ [1/084b/7]㊦全清上全濁上、「偃臥」上/平 平/去エンクワ [2/017a/5]㊦全清上去の3例がある。「謹慎」(該当字に下線を付す)は韻書で全濁去声、呉音資料である[貞華]*7に去声点、[安大]字音点に平声点、去声点。「擁怠」も韻書で全濁去声、[安大]に平声点、去声点。「偃臥」の前項は[貞華]に平声点、[安大]に去声点と上声点、後項は[新華]、[貞華]、[安大]に平声濁点。

18.「梗概」、25.「等輩」は韻書全清去声、ガイは慣用音と考えられる。26.「餅脧」は呉音資料に見当たらない。ここでは漢音〈上平濁〉と〈上去濁〉をともに《上去》から変化したものとみなす。30.「椀飯」は韻書で全濁去声、[安大]に去声点であるから漢音漢語を反映するとみなした。

■上上となるもの

1. 「土餌」 上上濁トシ [1/062a/7]㊦次清上去
2. 「鹵簿」 上上ロフ [1/019a/5]㊦次濁上全濁上
3. 「仮髻」 上上カケイ [2/116a/6]㊦全清上去
4. 「感緒」 上上カムソ [1/108a/3]㊦全清上全濁上

*7 呉音資料を調べるに当たっては、小倉肇 2014 の索引と分韻表で所在を参照し、影印等で確認した。本稿では高山寺本『貞元華嚴經音義』＝[貞華]、安田八幡宮本『大般若經』＝[安大]、高山寺本『新訳華嚴經音義』＝[新華]と記載する。

5. 「勝示」 上上濁ハウシ [1/031b/3]㊦全清上去
6. 「勇路」 上上ヨウロ [1/117b/4]㊦次濁上去
7. 「嘔吐」 上上ヲウト [1/051a/1]㊦全清上去
8. 「解纜」 上上カイラム [1/106b/7]㊦全清上去

上記リストに加えなかったものに、「九坂」上上濁キウハム [2/061a/2]㊦全清上全濁上がある。「九坂」は韻書で全濁上声であるから〈去〉から変化した〈上〉とみたいところだが、呉音資料には未記載。

1. 「土餌」は次濁去声で漢音漢語とみることに支障はない。5. 「勝示」は韻書で全濁去声だが、[貞華]に平声点があり、漢音漢語と認めた。

■上去となるもの

1. 「五夜」 上去 [2/010a/6]㊦次濁上去
2. 「子夜」 上去シヤ [2/085a/02]㊦全清上去
3. 「菟醬」 上去クシヤウ [1/086a/3]㊦全清上去
4. 「虎杖」 上去コチヤウ [1/003b/7]㊦次清上全濁上
5. 「鼓動」 上去コトウ [2/012a/3]㊦次清上全濁上
6. 「左道」 上去 [2/051b/6]㊦全清上全濁上
7. 「紫蓋」 上去シカイ [2/084b/7]㊦全清上去
8. 「紙面」 上去 [2/082b/7]㊦全清上去
9. 「手契」 上去 [2/082b/6]㊦全清上去
10. 「馬后」 上濁去ハコウ [1/034a/1]㊦次濁上去
11. 「馬上」 上濁去ハシヤウ [1/033b/5]㊦次濁上去、上濁去○シヤウ [2/094a/6]
12. 「鄙陋」 上去 [2/098a/2]㊦全清上去
13. 「虜掠」 上去リヨリヤウ [1/075a/7]㊦次濁上去
14. 「飲露」 上去イムロ [1/014a/3]㊦全清上去
15. 「隱路」 上去イムロ [1/012b/3]㊦全清上去
16. 「綵織」 上去サイチ [1/015a/2]㊦次清上去、上去サイチ [2/053a/1]
17. 「賞賜」 上去 [2/080a/7]㊦全清上去
18. 「髣髴」 上去ハウヒ [1/033b/1]㊦次清上去、上去ハウヒ [1/048b/7]
19. 「晩夏」 上濁去ハムカ [1/031b/2]㊦次濁上去
20. 「反畔」 上去ハンホ [1/033a/1]㊦全清上去
21. 「寶祚」 上去ホウソ [1/047b/1]㊦全清上去

22. 「勇毅」 上去濁ヨウキ [1/117b/4]㊦次濁上去
23. 「賄貨」 上去ワイクワ [1/090a/3]㊦次清上去
24. 「遠路」 上去 [2/089a/6]㊦次濁上去
25. 「癯癯」 上去エイロウ [1/017b/5]㊦全清上去
26. 「蠅蜒」 上去エンテイ [1/055b/4]㊦全清上全濁上
27. 「感會」 上去カムクワイ [1/108a/6]㊦全清上去
28. 「感興」 上去カムケウ [1/108a/1]㊦全清上去
29. 「九奏」 上去キウソウ [2/063b/1]㊦全清上去
30. 「仰望」 上去キヤウハウ [2/063b/3]㊦次濁上去
31. 「蜺貝」 上去ケンハイ [2/070b/2]㊦次清上去
32. 「閩外」 上去濁 [2/011a/5]㊦次清上去
33. 「懇望」 上去コンハウ [2/010b/5]㊦次清上去
34. 「草創」 上去サウサウ [2/052b/4]㊦全清上去
35. 「草聖」 上去サウセイ [2/053a/4]㊦全清上去
36. 「准后」 上去 [2/082a/6]㊦全清上去
37. 「水面」 上去 [2/120a/1]㊦全清上去
38. 「餅脰」 上平濁/上去濁ヘイタム [1/051b/1]㊦全清上去
39. 「稟性」 上去ホンセイ [1/047b/7]㊦全清上去
40. 「擁劔」 上去キヨウケム [1/094b/5]㊦全清上去
41. 「擁滯」 上去キヨウタイ [1/063b/6]㊦全清上去、上去ヲウタイ [1/084b/7]
42. 「柳黛」 上去リウタイ [1/075a/1]㊦次濁上去
43. 「遠岸」 上去エンカン [2/089b/3]㊦次濁上去
44. 「遠見」 上去 [2/089b/2]㊦次濁上去

10. 「馬后」、11. 「馬上」、19. 「晚夏」、22. 「勇毅」、32. 「閩外」 はいずれも韻書で次濁字であるから、漢音とみることに支障はない。

5 韻書《去去》の漢語

■去平となるもの

1. 「異味」 去平濁イヒ [1/013b/7]㊦去去
2. 「嫁娶」 去平カス [1/107b/1]㊦去去
3. 「弃置」 上平/去平キチ [2/062b/5]㊦去去
4. 「弃除」 去平 [2/062b/5]㊦去去

5. 「気味」 去平濁キヒ [2/063a/5]㊦去去
6. 「寤寐」 去濁平濁コヒ [2/011a/3]㊦去去
7. 「詐偽」 上平/去平サクキ [2/051b/7]㊦去去
8. 「思慮」 去平シリヨ [2/081a/6]㊦去去
9. 「布袴」 去平ホコ [1/048b/1]㊦去去
10. 「巨害」 去平キヨカイ [2/064a/5]㊦全濁上去
11. 「故障」 去平コシヤウ [2/011a/4]㊦去去
12. 「顧命」 去平コメイ [2/012a/1]㊦去去
13. 「至要」 去平シエウ [2/084a/3]㊦去去
14. 「至用」 去平シヨウ [2/084a/3]㊦去去
15. 「馳望」 去平濁チハウ [1/070a/7]㊦去去
16. 「蠹害」 去平濁トカイ [1/063a/3]㊦去去
17. 「吏幹」 去平リカン [1/075a/4]㊦去去
18. 「路畔」 去平ロハン [1/019a/4]㊦去去
19. 「暗誦」 去平アンシウ [2/039b/1]㊦去去
20. 「猶豫」 去平/去去イウヨ [1/013a/7]㊦去去
21. 「舊故」 去平キウコ [2/064a/4]㊦去去
22. 「厚地」 去平コウチ [2/010a/7]㊦去去
23. 「任意」 去濁平 [2/081b/2]㊦去去
24. 「政務」 去平 [2/110b/3]㊦去去
25. 「世路」 去平セイロ [2/110a/5]㊦去去
26. 「仲夏」 去平チウカ [1/068b/7]㊦去全濁上
27. 「放坐」 去平濁ハウサ [1/032b/5]㊦去去
28. 「櫪椶」 去平ヘイカ [2/066a/6]㊦去去
29. 「用意」 去平ヨウイ [1/117b/2]㊦去去
30. 「要害」 去平エウカイ [2/017b/3]㊦去去
31. 「幼少」 去平 [1/013a/4]㊦去去、去平エウセウ [2/017a/3]
32. 「睚眦」 去濁平 [1/040b/2]㊦去去、去濁平カイサイ [1/107b/5]
33. 「向後」 去平キヤウカウ [2/061b/5]㊦去全濁上
34. 「最勝」 去平 [2/051a/6]㊦去去
35. 「再拜」 去平 [2/051a/3]㊦去去
36. 「状帳」 去平 [2/082a/4]㊦去去
37. 「衆望」 去平濁 [2/081a/3]㊦去去

38. 「進善」 去平シンセン [2/080a/2]㊦去去
39. 「進退」 去平濁シнтаイ [2/083b/5]㊦去去
40. 「誓願」 去平 [2/110a/7]㊦去去
41. 「悵望」 去平濁チャウハウ [1/070a/3]㊦去去
42. 「眺望」 去平濁テウハウ [2/022b/1]㊦去去
43. 「鬪乱」 去平トウラン [1/063a/3]㊦去去
44. 「拝観」 去平 [1/032b/3]㊦去去
45. 「汎愛」 去平ハムアイ [1/032a/3]㊦去去
46. 「半漢」 去平ハンカン [1/033a/7]㊦去去
47. 「報幣」 去平ホウヘイ [1/047a/5]㊦去去
48. 「奉幣」 去平 [1/047a/5]㊦去去
49. 「報命」 去平ホウメイ [1/048a/2]㊦去去
50. 「俸料」 去平ホウレウ [1/048a/4]㊦去去

上記リストに加えなかったものに、「奉仕」去平濁ホウシ [1/048a/4]㊦全濁上全濁上がある。「奉仕」は韻書で全濁上声、〈去〉から変化した〈上〉とみたいところだが、呉音資料には未記載。

1. 「異味」、5. 「気味」、6. 「寤寐」、15. 「馳望」、16. 「蠹害」、23. 「任意」、32. 「睚眦」、37. 「衆望」、42. 「眺望」は、すべて韻書で次濁去声であるから漢音漢語とみるに支障はない。

■去上となるもの

1. 「歩射」 去上ホ○ [1/097a/7]㊦去去
2. 「路次」 去上ロシ [1/019a/4]㊦去去
3. 「气験」 去上濁キケム [2/063b/5]㊦去去
4. 「器量」 去上キリヤウ [2/061b/7]㊦去去
5. 「被盜」 去上ヒタウ [2/098b/1]㊦去去
6. 「幼稚」 去上イウチ [1/013a/3]㊦去去、「幼稚」 去上/去去エウチ [2/017a/4]㊦去去
7. 「孕婦」 去上ヨウフ [1/023b/1]㊦去全濁上
8. 「欠剩」 去上カンシヨウ [1/109b/3]㊦去去
9. 「最弟」 去上サイテイ [2/051b/3]㊦去全濁上
10. 「相応」 去上サウヲウ [2/051a/5]㊦去去
11. 「勝境」 去上 [2/079a/2]㊦去去
12. 「頓首」 去上濁トンシユ [1/063b/3]㊦去去

13.「諒闇」去上リヤウアム [1/074b/5]㊦去去

4.「氣駿」は韻書で次濁去声である。12.「頓首」は韻書で全清上声であり、どちらも漢音とみることに支障はない。

■去去となるもの

- 1.「意氣」去去イキ [1/013a/6]㊦去去
- 2.「坐事」去去 [2/052a/5]㊦去去
- 3.「故旧」去去コキウ [2/011a/7]㊦去去
- 4.「巨細」去去 [2/010b/4]㊦全濁上去
- 5.「故怠」去去 [2/011a/2]㊦去全濁上
- 6.「顧眄」去去コメン [2/011b/6]㊦去去
- 7.「飼面」去去シメン [1/096b/2]㊦去去
- 8.「地勢」去去チセイ [1/069a/2]㊦去去
- 9.「飫宴」去去ヨエン [1/117b/1]㊦去去
- 10.「利害」去去リカイ [1/075b/7]㊦去去
- 11.「暗夜」去去 [2/039a/4]㊦去去
- 12.「猶預」去平/去去 [1/013a/7]㊦去去
- 13.「幼稚」去上/去去エウチ [2/017a/4]㊦去去
- 14.「晏駕」去去 [2/016b/7]㊦去去
- 15.「舊意」去去 [2/062b/2]㊦去去
- 16.「貢士」去去 [2/011b/1]㊦去全濁上
- 17.「後素」去去コウソ [2/012a/5]㊦去去
- 18.「造化」去去サウクワ [2/052b/4]㊦全濁上去
- 19.「祭祀」去去セイシ [2/110a/7]㊦去全濁上
- 20.「政事」去去 [2/110b/3]㊦去去
- 21.「歳暮」去去セイホ [2/110a/4]㊦去去
- 22.「照地」去去セウチ [2/090a/5]㊦去去、去去セウチ [2/110a/3]
- 23.「拜謝」去去ハイシヤ [1/032b/2]㊦去去
- 24.「万雉」去濁去ハンチ [1/033b/5]㊦去全濁上
- 25.「分位」去濁去フムキ [1/041b/1]㊦去去
- 26.「陛下」去去ヘイカ [1/052b/6]㊦全濁上去
- 27.「宴会」去去 [2/017a/6]㊦去去、去去 [2/017a/6]

- 28.「疥癩」去去カイライ [1/024a/6]㊦去去
 29.「伉儷」去去カウレイ [1/107b/7]㊦去去
 30.「鑒誠」去去カムカイ [1/108b/4]㊦去去
 31.「旧貫」去去 [2/061b/4]㊦去去
 32.「灸柱」去去キウチウ [2/103a/6]㊦去去
 33.「徼道」去去 [2/002a/1]㊦去全濁上
 34.「寇盜」去去コウタウ [2/011b/2]㊦去去
 35.「混沌」去去 [2/011b/5]㊦全濁上全濁上
 36.「際會」去去 [2/111b/7]㊦去去
 37.「函(顛)會」去去シンクワイ [2/028b/7]㊦去去
 38.「綽髻」去去スイサン [2/120a/5]㊦去去
 39.「政教」去去 [2/110b/3]㊦去去
 40.「細碎」去去セイスイ [2/111b/7]㊦去去
 41.「紹介」去去セウカイ [2/111a/5]㊦全濁上去
 42.「少壯」去去 [2/111a/2]㊦去去
 43.「愷溷」去去タンコン [1/090b/2]㊦去去
 44.「悵望」去去濁チャウハウ [1/069b/7]㊦去去
 45.「定面」去去 [2/023a/2]㊦去去
 46.「朝廷」去去 [2/022a/3]㊦去去
 47.「動靜」去去トウセイ [1/062b/5]㊦全濁上全濁上
 48.「遁世」去去トンセイ [1/063b/2]㊦去去
 49.「放縱」去去ハウシヨウ [1/032a/3]㊦去去
 50.「万乗」去濁去 [1/031b/6]㊦去去
 51.「報賽」去去ホウサイ [1/047a/5]㊦去去

24.「万雉」、25.「万位」、50.「万乗」は韻書で次濁去声であり、漢音とみることに支障はない。

6 拍数による分析

これまでみてきたように、字音の《去》は《上》や《去》の後項に置かれたとき、《平》や《上》に変化することがある。一般的に、日本漢字音の曲調音節（去声や平声軽）は呉音であれ漢音であれその曲調性は安定しているとはいいがたい。拍に開いたときに2拍であれば元の曲調性はLH（やHL）の形に置き換えられ安定することは多いが、1拍のもの

はその限りではない。その意味では拍数ごとに字音声調のふるまいが異なるのは、外国語としてではなく日本語のアクセント体系に生じたことであるため、と言えるだろう。そこで漢音漢語における〈去〉が語頭環境と非語頭環境におかれた場合に分け、それぞれ1拍字と2拍字とがどのような現れ方をするかを見る(表2)。表中、異なり語数と()に%とを示した。

まず語頭環境から見ると、2拍字にはほとんどが去声点(トウ)が差されているのに対して、1拍字は去声点(トウ)が差されるものは7割にとどまり、約3割に上声点(トウ)が現れる*8。語頭1拍字のこの数的分布は、鎌倉時代初期ごろに生じたR(上昇拍) > H(高平拍)の変化*9を被ったものと考えてよいだろう。また語頭環境にこの傾向が明瞭に見られるのは、去声拍が語頭位置にのみ現れやすい(金田一春彦 1944・1951)という制限の現れと見てよいだろう。次に非語頭環境では、各声点の現れ方にこそ違いは見られるが、拍数ごとにははっきりとした違いが見られない。非語頭環境の〈去〉のふるまいについては、音節の長さではなく、複合の際の位置が関与していることが確認される。

	語頭〈去〉		非語頭〈去〉	
	1拍	2拍	1拍	2拍
平	-	-	33 (45)	55 (39)
上	39 (30)	6 (3)	11 (15)	10 (7)
去	93 (70)	228 (97)	29 (40)	76 (54)
合計	132 (100)	234 (100)	73 (100)	141 (100)

表2 出現環境・拍数別〈去〉の現れ方

7 漢音漢語の後項における〈去〉のふるまい

本節では第3節から第5節までの分析をもとに、本資料における漢音漢語の後項〈去〉のふるまいについて考察する。

まず第3節で見たように、韻書の声調は本資料で漢音漢語と認めたものの声点によく合致する。先行研究で述べられる通り、反切や同音字注が韻書の示す中古音の枠組みに一致すること、および人為的に正しい声調に戻した痕跡が認められるという指摘から、本資料の漢音漢語声点にも韻書の声調に意図的に準じたものがあってもおかしくはない。中低形

*8 平声点については本稿では対象外としているが、同様の調査を行った『新猿楽記』(加藤大鶴 2015)では、平声点と上声点が2割ずつ、去声点が6割程度という結果であった。

*9 鎌倉初期ごろの中央語において上昇拍が消滅し高平拍に変化したことが説かれる(金田一春彦 1964, 364)。『金光明最勝王経音義』(1079写)、『法華経单字』(1136写)の呉音声点についても、この変化が認められるとされている(沼本克明 1976)。

が4~5割も現れていることは、和化漢文のいくつかの資料における漢音漢語*10において中低形がほとんど現れないことと比べると、いかにも日本語のアクセント体系とは距離があるように感じられる。この点で、本資料は佐々木勇 2009, 610-611 が指摘するような、漢籍訓読資料における漢音声調に近い傾向、すなわち韻書の学習に支えられた、字音の規範性を強く反映した字音としての特徴を有していると言える。しかし本資料には同時に、韻書から説明のつかない唐代音の特徴や日本語化された漢音声調が存在することも指摘されている(上記佐々木論文)。韻書〈去去〉〈上去〉の後項が平声や上声で現れることは、まずその一端であると捉えることができよう。それは、いずれの場合も、2字が複合し1語としての緊密さを作るために、音調の中低形を回避したものと考えられる。

その上で、平声と上声とで異なる現れ方をすることについては、どのように考えられるだろうか。冒頭で述べたように、〈去〉や〈上〉に後接する〈去〉が上声となるのは呉音漢語に顕著な現象であり、これまでも呉音資料について広く「連音上の変化」として報告されてきたことである(奥村三雄 1961、沼本克明 1978)。漢音漢語についても、規範的な力が弱いと考えられる資料に現れるものには、この「連音上の変化」が生じていることが報告されつつある(石山裕慈 2011・2014 ほか)。

もう一方の〈去〉に後接する〈去〉が平声となることについてはどうか。この現象は呉音においては、少なくともある程度まとまった数として観察できるものとしては、報告されてはいない。したがって漢音漢語において特徴的に生じている現象であると認めてよいと思われるが、漢音漢語における現象としても従来あまり積極的に報告されてこなかった*11。本稿における報告は、この現象が(1)漢音漢語に生じていることを確認し、同時に(2)『新猿楽記』や『本朝文粹』などの「字音の規範性が弱い漢文資料」以外の漢音漢語にも裾野を持つことを示唆する。

このように見てくると、先行研究が示すように本資料の漢音漢語には、性質の異なる少なくとも2つの要素が混在していると考えられるべきであろう。韻書で〈上去〉や〈去去〉となる漢語の後項に去声点が差されるものは規範的な声調を記そうとしたのであろうし、平声点や上声点が差されるものは方法こそ違いますが日本語アクセント体系のもとで1語として実現した形を反映させたのであろう。第5節で掲げた次のような1字に複数の声点が差される例、あるいは別箇所にも両様の声点が現れる例は、そうした異なる立場の混在を直接に示しているものと思われる*12。

*10 『尾張国郡司百姓等解文』(加藤大鶴 2009)、『宝物集』(同 2010)、『新猿楽記』(同 2015)。

*11 中低形回避のかたちの一つに、〈去〉に後接する〈去〉を平声で実現させるものがあることは早くから知られている(金田一春彦 1964, 323、桜井茂治 1994、榎木久薫 2003・2004)。

*12 これらは後項の去声字に平声点と去声点とが差される例だが、次のように上声点と去声点とが差される例

- 「餅脧」上平濁/上去濁ヘイタム [1/051b/1]㊦全清上去
- 「猶預」去平/去去イウヨ [1/013a/7]㊦去去
- 「左道」上平サタウ [2/052b/1]㊦全清上全濁上、上去[2/051b/6]
- 「虜掠」上平ロリヤウ [1/019a/5]㊦次濁上去、上去リヨリヤウ [1/075a/7]
- 「悵望」去平濁チャウハウ [1/070a/3]㊦去去、去去濁チャウハウ [1/069b/7]

8 補足的説明と課題 呉音去声の低起性について

本稿の主たる目的は上記でほぼ果たしたと考えるが、韻書〈去去〉〈上去〉の後項が平声で現れる場合と上声で現れる場合とで、どのような言語的要因が関わっているかについては、補足的に付言しておきたい。

漢音漢語に特徴的な〈去去〉の後項が平声(LまたはLL)で現れることについては、〈去〉の実現音調がまず明確に低起性を有しており、そのような特徴を持つ要素同士が日本語側で複合するプロセスを経ていると考えられることを、加藤大鶴 2015 で述べた。とすれば、呉音漢語において〈去去〉の後項が上声(HまたはHH)で現れるのは、〈去〉の実現音調が明確な低起性を有していなかったか、複合プロセスが漢音と異なっていたかのどちらか、あるいは両方ということになる。まず呉音〈去〉の低起性は少なくとも漢音と比べて弱かったかという、そのように言い切ってしまうことには躊躇がある。2字漢語の後項に限れば確かに低起性は保持されないが、多くの呉音資料において前項は漢音漢語と同様に低起性が保持されるからである。

ここで呉音声調が日本語アクセント体系のなかでどう受容されたかを考えるために、院政期の辞書類に「俗」「此間」等の注が付されるもの*¹³に着目する。すると次の1~3のような事例が散見する。

- 1.「旃檀」此間云音善短(去上)[和名抄京十 72 オ]
- 2.「梅檀」俗云セムタム(平上上濁上)[名義抄観 343]
- 3.「梅檀」去平濁センタン[色葉下 107 オ]

「旃」「檀」も各種呉音資料から単字の声調としては去声と認められるから、1の声点は呉音漢語としては最も典型的な現れ方をしている。2.は語頭の低起性を2拍で受容したものであろう。このような事例は古今集声点本のような和文脈においても観察される(「閩

も1つだけあった。「幼稚」去上/去去エウチ [2/017a/4]㊦去去

*¹³ 注9文献ではこれらの注が付される漢語を院政期における「日常漢語」とし、それが呉音声調に由来することを指摘している。

浮」去上濁（高貞・梅・京中・高嘉・伊・寂・毘・清聞・清声）・平上濁（訓・尊恵）（秋永一枝 1974）。またわずかではあるが、3. のように漢音漢語と同様に後項の〈去〉を平声で実現するものも見受けられるのである*14。この点で和語やそれに準じた位相である「俗」注付き漢語の発音と、外国語としての漢語らしい発音とは異なっていると考えるべきかもしれない。すなわち呉音漢語の去声について次のような推測が成り立つ。

- I 和語やそれに準じた位相では低起性を失わないような複合のプロセスを経た
- II 外国語としての漢語らしい発音が求められる位相では、低起性が失われやすい複合のプロセスを経た

要するに漢音漢語の〈去〉については、呉音漢語における I の場合の〈去〉と似たふるまいをしていると考えられるのである。一方、II については、呉音が仏典読誦等による口頭の伝承の中で培われ、そこからその伝承された音調を伴う形で漢語として切り出されたという成立事情によって、生じているのではないかと考えるわけである。

最後に、次のような解釈に苦しむ例があることも、課題として掲げておく。

- 4. 「袈裟」俗云計左（上上）[名義抄図 328]（「袈裟」俗云ケサ（上上）[名義抄観 747]）
- 5. 「袈裟」俗云介佐（上上）[和名抄伊十五 5 才]

これらの声点が反映する院政期はいまだ去声拍が力を持っていた時代であり、語頭に上声点が差されることの説明はしにくい。しかも「俗」注が付される例であるから和語に準じた位相に生じた発音であると考えられるわけであるから、なおのこと説明が難しい。また、和語に準じた位相というのであれば、類別語彙（早稲田語類）のうち 1 拍体言第一類には「紗（しゃ）」「痔（じ）」など呉音去声由来のものが多く含まれ、去声拍の消滅とともに H に合流したと理解されるが、古くから低起性を有していれば第四類早稲田語類の R になぜ合流しなかったのかという疑問もある（秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊 1998）。呉音と漢音とで〈去〉の複合プロセスが異なるという説明だけではすべて説明しきることは容易ではなさそうである。あるいは何か別の要因が隠れているのだとしても、現状では特定できる根拠に乏しい。今後の考察の課題としたい。

参考文献

- 秋永一枝 1974 『古今和歌集声点本の研究 索引篇』校倉書房
 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊 1998 『日本語アクセント史総合資料 研究篇』

*14 その他に、「牛頭香」俗音五豆（去上）[和名抄京六 58 才]、俗音五豆（去平）[前田本和名抄] などもある。

東京堂出版

- 石山裕慈 2011 「『本朝文粹』における漢語声調について」 訓点語と訓点資料 126
 —— 2014 「漢音声調における上声・去声間の声調変化：日本漢文の場合」 国文論叢 48
- 上野和昭 2012 「『名目抄』所載の漢字二字四拍の語に差された声点について」 論集 VIII
- 榎木久薫 2003 「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華嚴經の漢字声調について—保延本法華經単字との比較—」 鳥取大学教育地域科学部紀要教育・人文科学 4-2
 —— 2004 「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華嚴經の複数種声点差声字について」 鳥取大学教育地域科学部紀要教育・人文科学 5-2
- 奥村三雄 1961 「漢語のアクセント」 国語国文 30-1
 —— 1966 「漢語アクセント小考—三卷本色葉字類抄を中心として—」 訓点語と訓点資料 32
- 小倉肇 2014 『続・日本呉音の研究』 和泉書院
- 加藤大鶴 2009 「『尾張国郡司百姓等解文』における二字漢語の声点」 論集 V
 —— 2010 「『宝物集』の漢語声点」 論集 VI
 —— 2015 「去声字の低起性実現から考える漢語アクセントの形成プロセス：『新猿樂記』の漢音語彙と呉音語彙を比較して」 訓点語と訓点資料 135
- 金田一春彦 1944 「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就いて」 『国語学論集』 橋本博士還暦記念会
 —— 1951 「日本四声古義」 『国語アクセント論叢』 法政大学出版会
 —— 1964 『四座講式の研究：邦樂古曲の旋律による國語アクセント史の研究各論(1)』 三省堂
- 桜井茂治 1994 「「出合」アクセント史論」 佐藤喜代治(編) 『国語論究第5集 中世語の研究』 明治書院
- 佐々木勇 2006 「改編本『類聚名義抄』と三卷本『色葉字類抄』の漢音」 訓点語と訓点資料 116
 —— 2009 『平安鎌倉時代における日本漢音の研究 研究篇』 汲古書院
- 鈴木真喜男 1963 「三卷本色葉字類抄の漢字音標記(一) 一直音音注について」 文芸と思想 24
- 高松政雄 1980a 「呉音声点の性格」 国語国文 49-3
 —— 1980b 「呉音声調史上の一齣—色葉字類抄の声点—」 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 28
- 二戸麻砂彦 1979 「前田家本色葉字類抄音注攷 I—同音字注の考察—」 国語研究 42
- 沼本克明 1976 「呉音の声調体系について」 国語学 107
 —— 1978 「呉音系字音の祖系音について—声調体系からの接近の試み」 国語国文 47-7
 —— 1979 「平安時代に於ける日常漢語のアクセント」 国語国文 48-6
- 藤本灯 2013 「字音から見た三卷本『色葉字類抄』「仏法部」の性質」 訓点語と訓点資料 130
- 峰岸明 1999 「尊經閣文庫所蔵『色葉字類抄』三卷本 解説」 『尊經閣善本影印集成 18 色葉字類抄—三卷本』 八木書店

*本稿は「資料横断的な漢字音・漢語音データベース構築・公開に向けた基礎的研究」(2019~2021 年度科学研究費助成事業・基盤研究 C・研究課題番号:19K00650)の一部である。

[かとう だいかく、跡見学園女子大学文学部准教授]